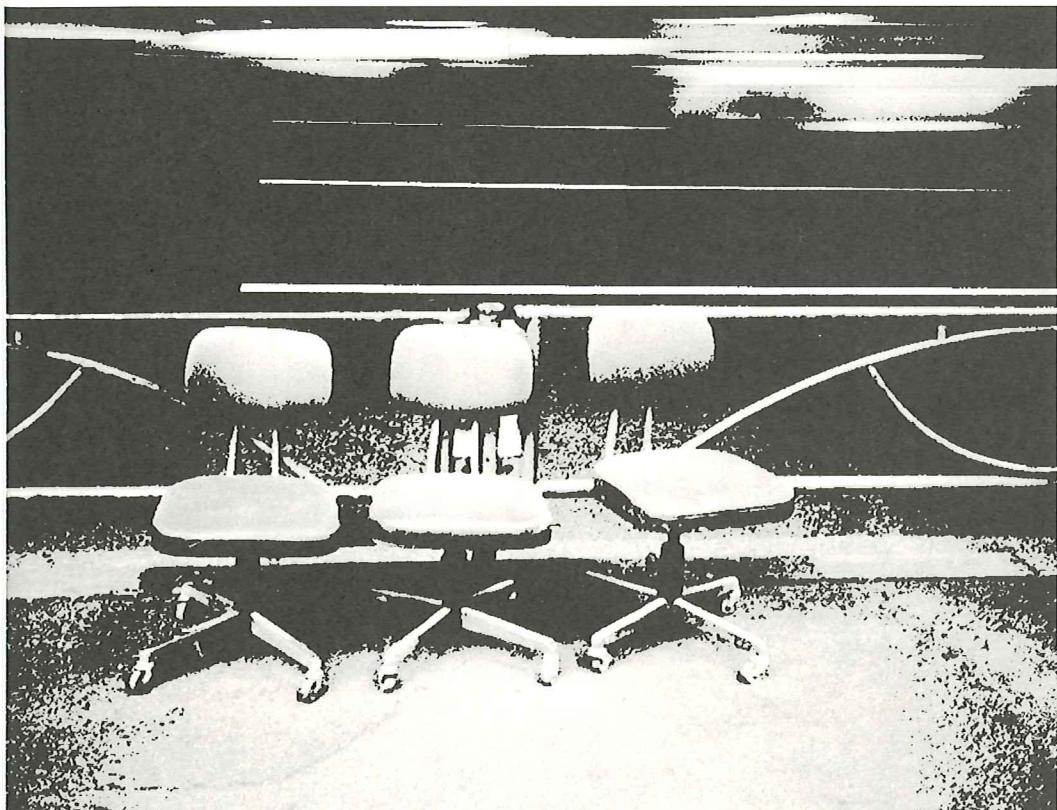


現代と『歎異抄』

高 史明
ko samyong



いよいよ「現代」という時代が、総体として根こそぎ見える時代に入つてきました。

今、起きているさまざまな問題をどう受け止めるのか。受け止める視点はどこにあるのか。このことを抜きに仏教を語るということがあつては、生きた人間の生きざまのところで仏のはたらきが、どうはたらいているのかが見えなくなります。

昨年、九月、米国に同時多発テロ事件が起きました。このテロ、そして、ただちに発信された「これは文明に対する戦争である」との声明は、現代をまるごと私たちに示しています。いまは「報復」の連鎖反応です。「無明」の闇は、いよいよ深くなっています。

思えば、文明世界の二〇世紀は、ヨーロッパに始まつた近代文明の世界観にもとづく革命と戦争の世紀であります。すべてが、人間中心の思想で截断されたゆえです。そして多くの死者を出しました。この死者の立場からみると、文明を滅ぼすのは文明以外にはないということではないでしょうか。文明は「文明」によって滅びる。例えば、近代科学が誕生して以降、少し幅をみて五百年という中で、現代文明は何を積み重ねておりましょう。人間中心の「文明対野蛮」の対立意識は自分自

身が見えていない。今回のテロは残酷ですが、それがまた文明の生んだものという側面はないのか。そして、報復です。非常に恐ろしい世界の展開であるという感じがいたします。このことをいま少し考えてみましょ。

実際、繁栄とか文明とかとしきりに言われていますが、経済の側面を見ましてもすでに完全に行き詰まつていたわけでしょう。しか

も、行き詰まつている原因はどこにあるのかを考えようとしている。いや、考える手がかりを文明自身が失っているのではないか。そういうことは全部棚上げにしておいて、テロに直接反応しかしない。テロを生む原因を、経済を見る目がないのと同様に見ようとしている。

私たちはこの二〇世紀に二つの世界大戦を経験しています。その第二次世界大戦の節目には、一九二九年の大恐慌があります。この大恐慌の基本的、構造的欠陥というものが、根っこにおいて戦後も克服されず、それどころか七〇年代から八〇年代にかけて、ここ二〇、三〇年の間、刻々と深まつているように感じます。それにつれて、いわゆる先進文明国とそうでない後進と言われている国々との矛盾がまことに深いものになつていているのです。「善人」とは何か、「悪人」とは何か。「善人」の目で生死の矛盾が克服できるか。それ

ものに専有されているか。人間中心が根こそぎに考えられてよいのです。

人間とは何かです。問題は「文明対野蛮」ではない。中国の現代作家、魯迅に『狂人日記』があります。彼は、近代文明のどん底と化した中国の混乱の極にあって、「人間は皆、正気のつもりでいるけれども狂つているのじやないか」と見ていくわけです。しかも、それに気がつかないので。弱肉強食です。「人間は、人間を食っているのじやないか」と言

う。しかし、狂人にはその人間の根源的闇が見えるのです。最初は他人事としてしか見えていなかつたその闇が、ふと気がついてみると、自分自身のことだつたわけです。自分も例外ではなかつた。そして「まだ、人間を食つたことのない人間はいるかしら……」と叫び出し、「子どもを救え」の叫びで締めくくるのです。それはあの当時の、乱れに乱れた中国のなかで作家活動をした魯迅の見方ですが、今日でも同じです。もつと悪くなつていています。ヒューマニズムの裏には、この闇があるので。そして、思うのです。今度のテロ事件のこととも、「文明対野蛮」ではなく、もつと深く、例えば『歎異抄』の眼に照らしていいのです。「善人」とは何か、「悪人」とは何か。「善

が問われてよいのです。もちろん人間の世界では、善と悪の基準がないと生きていけません。それは必ず明確にならなければなりません。しかし、それは「……一旦そのいわもあるににたれども……」でしよう。「本願他力の意趣にそむけり」です。根本の「いのち」を見失っているということ。

● 善人と悪人

『歎異抄』が教えるその眼^{まな}ざしとは、善人とはどこに立っているのかということです。人間中心の、人間の迷いのチエに立っているのではないかと教えてている。人を殺してはならないという徳目は、歴史的に普遍的な大事なことだと思いますが、その徳目において人間は人を殺すのです。しかも、大量にです。それが戦争でしょう。しかも、そこでは、たくさんの人を殺した方が、悪人どころか英雄になるという人が人間の善惡を基準にした善人の立場でしょう。アメリカはその戦争を展開するつもりのようです。

現代人はいまこそ、この人間の根本的闇を直視しているのです。

思えば、仏教では、阿闍世^{あじやせ}の闇でもって、

その人間の本質というものを抉り出して、未來も見届けられていたのでした。ヨーロッパの流れでは、オイディップスがそうでしょう。『夕鶴』の木下順二はオイディップスという人物を、善人の物語と見ていました。善きことを

しようとして、気づいてみると自分こそが悪人だったという善人物語です。親殺しがテマであることが恐ろしい。木下は、人間の本質を深く見抜いているからこそ、オイディップスの読み方が非常に深いのでしょう。

オイディップスは国中に多くの悲劇が起きたとき、不幸の原因を探します。そして、悪い奴を根絶すればこの不幸が克服できると考えるわけです。そこで、全国に御触れをまわして悪い奴を徹底的に探すわけです。ところが、悪の元凶は自分だつたことに気づくのです。

自分が、父を殺し、母を娶つて子どもを産んで、人間世界全体に不幸の種を蒔き散らしていた張本人であると気づく。それが「善人」であったわけです。その時、彼はどういう行動に出たか、自殺を勧める者もいました。しかし、彼は死にません。では、何をしたのか

というと、自ら両眼を短刀で突き刺し、血だらけになつて放浪の旅に出るのです。人間の見る眼とは、見えていなかつたということを暗示している。ギリシャの目は深い。それを善人の物語として見ますと、現代、それが極にきた、善人の闇が極にきたと思うのです。

『歎異抄』の眼がなくてはならないのです。最近の出来事を見ていると、いよいよそう思えてまいります。つまり、善人というのは、自分の眼を信じているのです。自分の眼、自分の理性を信じているわけです。しかし、現

代文明の闇は、まさに人間の理性的立場に起因するのではないか。それを問うことなく、「文明対野蛮」というのでは、この五百年の蓄積を超えて二十一世紀を開くことはできないのではないか。

例えば、日本のバブル期の教訓で考えますと単純明快です。バブルの中身とはいつたい何か。単純に言えば、あの景気の良さは、株券と地代の値上がりが生みだした風船だつたのでしょう。決して物を作り、作った物がそれなりの値打ちで取り引きされたということではありません。まったくの空中楼閣です。地価とは、まさにその時その時の地域の環境全体の中でしか生まれないものでしよう。文明がまさに地価を生んでいくわけです。人間世界以外の世界に何處に地価というものがあるりましょう。

「株」もそうです。それを操作の対象として、ありもしない価値でどんどん値上がりさせて、景気がいいと見るような文明は、もう早晚、破裂するのは見えていたわけです。株も地価も現代人になくてはならないものであるなら、人間はもつと自然の大地の大切さに気づいてよいのです。その虚構を世界社会の仕組み全体にまで広げてしまつていたから、その悲劇は大きくなつたのです。人間のこの近代文明のあり様は、五百年、あるいは千年くらいを丸ごと見直さなくては、二十一世紀

は開けないという思いが強くあります。

●現代と『歎異抄』

ところで、この人間の今日的現象は何か。人間とは、もともとある意味で実体のないものに夢を託すといいますか、觀念化して、本來ないものに、妄想的な価値を付加するという面があります。今回、世界貿易センタービルが内部崩壊で崩れるのを見たときに思いましたのは、まさに現代文明が内部崩壊していく姿でした。あの悲劇、それは内側に崩れていました。

現代というのは、そのように空中楼閣の上に立っていますから、第三次世界大戦の可能性だって、決して否定できない。その時は恐るべき数の犠牲者が出ると思いま

す。

そういう意味で、本当にあの犠牲者を思うのであるならば、声を失い、肉体を失つてしまふ人たちの、その仏さまの声をどうしたら聞けるのか。それは生者中心に痛みや怒りや憎しみというところで見るだけではなくて、亡くなつた仏さまが、痛みや怒りや憎しみを持つてゐる私たち生者の方をどう見ているのか。その転換がなくてはならない。二〇世紀の誤りを繰り返してはならないのです。仏さまは、いまも私たちの目の前に立つておられるのであります。「往相即還相」と教えられている。また『歎異抄』には、「念佛には無義をもつて義とす」と説かれています。

「義」の世界に執われている私たちは、仏さまに学ぶことを忘れ、生者の論理で仏さまを見る。そこには報復と怒りしか出てこないのでありましょう。その怒りを慈しみへと転換させる、「慈悲」のこころがなくてはならないのです。「無義をもつて義とす」という不可思議な世界が、「義」のみをすべてとする人間の理性の闇を超えて新しい展望をひらくのです。

いま一度、「文明」とは何かを考えてみましょ。

文明ということで思い起しますのは、第一次世界大戦の悲劇の後に、このような戦争を二度と起こしてはならないということで「国際連盟」が生まれます。国際連盟の基礎となる思想は、カントの『永遠平和のために』という論文だと聞きました。その中でカントは、平和を維持するためには何が必要であるのかを説き、同じく「文明と野蛮」という問題の立て方をしますが、その発言は根本的でとても貴重です。

要約しますと、カントは、いわゆる文明人は、彼らから見て未開と見えるほかの土地に行つて、その土地に住んでいる人を見ても、それが自分たちと同じ人間であるとは見えていないと指摘しています。そして、そのことを克服しなければ、アジア、アフリカ、日本や中国にも触れながら、本当の意味で平和を維持することは難しいと述べています。この

思想のもとに国際連盟が生まれるので。それが、第二次世界対戦後は「国際連合」に発展していくわけです。この経緯をみても、今回の「文明対野蛮」という問題の立て方が、イスラム対キリストという十字軍以来の考え方の延長にあって、第一次、第二次世界大戦の教訓をいかに汲みつくしていないのかが明らかです。

問題はしかも、日本の近代のことでもありました。ヨーロッパの近代化された国々がアジアに押し寄せてくるわけですが、その猛烈な圧力の下で一八六八年、明治維新が実現します。その後、一八七二年、福沢諭吉は『学問のすゝめ』の中で「実学」という言葉で何を見ていたかですが、今日の言葉で言えば、それは科学です。実際に役に立つ学問である科学を導入して、それでもって日本を固めなければ、国の独立、個人の独立、家の独立も実現されないと考えるのですが、その優れた眼さしも百年しか生きなかつた。私たちはいま、「科学」を万能とする人間の目を、「無義をもつて義とす」という、「自然法則」の教えによつて洗い、再生して真摯に生きてよいのです。仮を見つめ直して、仮想現実のただ中で、眞実の大地を開拓したいものです。(談)

(コ サミヨン・作家)